九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[004] 九大國文學會報 : 4

https://doi.org/10.15017/15460

出版情報：九大國文學會報. 4, pp.1-10, 1933-02-05. 九州帝國大學國文學會
バージョン：
権利関係：

昭和八年二月

會報

第四號

九大國文學會

目次

雜報……一
昭和七年度第二學期講義題目……四
研究室だより……五
昭和七年度決算報告……八
會員異動……九
編輯後記……一〇

雜報

一、九月二十七日（金）

午後五時より第二學生集會所に於て、研究發表會を兼ねて例會を開催。春日、小島両先生を初め多數出席あり、歡談裡に夕食を喫し、それより左記の如く研究發表あり、午後九時閉會した。

一、呼吁止点私考　橋本智英氏

一、万葉集の理念並に其の展開　延壽寺末彌氏

一、十一月二十八日（月）

国文學臨時講義の講師として、京都帝国大學助教授頴原退藏氏來學せらる。講義題目「俳諧史」一單位、講義日數一週間。

一、十一月三十日（水）

午後五時半より本會主催の下に、第二學生集會所に於て、臨時講師頴原退藏氏の歡迎會を開く。先づ春日先生の挨拶あり、主賓之に答へ、一同寛いで晩餐を共にし又茶菓を喫しつゝ歡談數刻、盛會裡に午後七時半會を閉ぢた。

一、十二月十六日（金）

午後五時半より第二學生集會所に於て研究発表を兼ね、休暇前最後の例會を催す。春日先生を初め會員多數出席、一同夕食を共にして後左記三氏の有益且つ興味ある研究発表あり。歓談後午後十時半閉會。たゞ當日は小島先生が御風邪のため御欠席されたのが残念であつた。因みに當日の演題左の如し。

一、太陰傳説に就いて　藤野邦雄氏

一、肥後の国學に就いて　白木喬氏

一、文學史の立場　笹月清美氏

一、一月九日（月）

冬期休暇明けと共に昨年末に引續き京大頴原先生の俳諧史第二回御講義、本日より向か一週間開かる。

一、一月十四日（土）

頴原先生の御講義本日を以て終了。午後一時より第二集會所に於て送別茶話會を開催。主賓頴原先生は勿論、春日、小島両先生を始め會員多數出席、夜刻幹事の開會の辞についで春日先生より御礼の御挨拶あり、之に對し頴原先生の謝辞あつて

後、一同茶菓を喫しつゝ歓談、會を閉ぢたのは午後二時半であつた。

一、一月二十九日（日）

午後二時より第二學生集會所に於て本年度卒業生論文発表會を開く。折柄の吹雪を衝いて會するもの春日、小島両先生を始め長、笹月、畑、笹渕氏の諸先輩外在學生二十名、先づ學部正玄関前に於て記念撮影をなし、それより直ちに會に移り、左記の順位で卒業諸氏の積年の研鑽になる論文発表説明があり、近來稀に見る盛會を極めて、午後七時半會を閉ぢた。

一、平安朝女流日記文學の凝視的研究　藤井　毅氏

一、萬葉集に現はれたる奴婢及び調庸の民を中心として　西田琢磨氏

一、十六夜日記の研究　林　敏氏

一、北原白秋の短歌　上村孝二氏

一、萬葉集の理念並に其の展開　延壽寺末稱氏

尚ほ當日席上に於て昭和八年度幹事の件につき種々論議があつたが、結局本年度に限り一年生の互選法を採擇し、新幹事として藤野邦雄氏、山崎忠夫氏選ばれ、會長の承認を得た。

一、二月十日（金）

午後六時より新卒業生送別宴會開催の豫定、場所未定。

昭和七年度第二學期講義題目

春日教授	國語學概論（文字文体篇）
〃	演習 蜻蛉日記
〃	堺中納言物語（課外研究）
小島助教授	講義 近世の小説
〃	演習 西鶴置土産
〃	芭蕉七部集（課外研究）

研究室だより

笹月清美

けふは珍しく吹雪になりました。紅、白、乳代赭、色とりどりの殿堂を斜に切ってしきりに粉雪が飛んでゐます。

研究室は昨秋再度の轉居を致しました。こんどは先輩諸氏おなじみの十三番教室、二階の東北隅の角の室です。圖書館を目前に見、例の寢轉ぶによい芝生を眼下に見下してゐます。朝、一寸窓辺のスチームの傍に寄って見ますならば、工科や農科の方へ思ひ〳〵の歩を運ばれる斯界の耆宿、又新進學者の風姿は全く一瞥の裡です。

こんどは壁にも本棚を造りつけにしました。その天井に達する様は正に書物に埋まる感を徹底せしめるものです。書物は各部各時代萬遍なく徐々に増加してゐます。今試みに將に書棚に入らうとしてゐる最近購入書の名前を左に連ねてみませう。

續日本隨筆索引	太田為三郎	国學者著述一覽
大言海 第一冊	大槻文彦	瀧澤馬琴翁の系譜及び像
国語発音アクセント辞典	神保格 常深千里	東語管要抄「方言」抜刷

関書院編輯部
森潤三郎
吉町義雄

尾張の方言　加賀紫水

倭漢朗詠集鈔

韻鏡考附錄隋唐音圖　大矢透

正俗字辨　東山一心院響響上人口説

唐音十八考　中山久四郎

国文學史新講 上　次田潤

日本詩歌のリズム　相良守次

現代日本文學序説　唐木順三

三寶繪詞　文永十年寫本の複刻

神皇正統記述義　山田孝雄

金槐　つれづれ草の抄

「蚕が桑の葉をたゆみなく、あます所なく、極めて巧みに、かすかな音を立てながら喰ひ盡すやうに、そして美しい緑色の糞を落すやうに、書物の讀んでみたか。」と、本棚をぐるりと見廻しながら某君の述懐。まことに同感です。

徒然草吟和抄　藤原芳樹

寄居寄談

三十六人家集　複製

——おたかぶ——

壁紫集　古今集

萬葉集金釋　第三冊　鴻巣盛廣

めなぎ樽研究　創刊号より

諸国奉納尚歯會　鈴鹿知

神楽歌新釋　平大平

稀書複製會　第八期の中

——野良岡相撲、十二たんさうし——

両先生は益々御健祥にて且つ非常な御健筆であります。その事はいろ〳〵な刊行物で既に御承知の事と存じます。さてこゝに特に駄足を附加して置きたいと思ひますのは、小島先生の「ふぐ」に就いての實踐的御研究であります。近來は正に「通」を以て自他共に許すに至られました。これは特に先輩諸氏へは、遠隔の地に在つてわが九大国文學會をなつかしく懷故されるよすがとして特種であらうかと存じます。

今學期は京都の頴原退藏助教授、東京の黒板勝美博士、五高の岡井愼吾博士の馨咳に接しました。国文學會の毎週の講讀會も例年に増して盛んでありました。

（一月二十六日記）

編輯後記

前號にも豫告して置いた通り經費の都合で至極簡單な會報第四號が出來ました。次號では新幹事両君が袂腕を振はれることゝ思ひます。

こゝに幹事の任を離れるに際し萬事に指導の労を惜まれなかつた両先生を始めその他の方々及同僚白木兄に衷心から感謝の意を表します。（青）

會費納入の成績が可なりよくなつて來たことは會のため實に欣ばしいことでありまして幹事として感謝に耐えない所であります。經濟的基礎を固くし、將來の隆昌発展を期するために更に一層會員諸氏の御援助を御願ひする次第であります。

本會報に初めて「會計報告」を記載しましたが、會の收支を明かにし事業の内容を詳にするため此事は爾後も必ず御報告したいと思つてゐます。（白木記）

昭和八年二月三日印刷
昭和八年二月五日発行（非賣品）

編輯兼　青　敏夫
発行人　白木　喬

印刷人　永瀬十六紅
福岡市外箱崎松濱町
印刷所　プリント社

発行所
九大國文學研究室